

(熊本県立天草拓心高等) 学校 令和 6 年度 (2024 年度) 学校評価表

1 学校教育目標

「夢は空より高く 心は海より広く 道を拓かん」の校訓を基本理念とし、特色を生かした学びをととして生徒一人一人の個性と可能性を伸長する。また、子どもたちの未来を切り拓くとともに、心豊かで地域創生に貢献できる魅力あふれる人材を育成することで、地域から信頼される活気あふれた学校づくりを目指す。

2 本年度の重点目標

- (1) 確かな学力を育成し、生徒一人一人に寄り添った指導の充実を図る
 - ア 「主体的・対話的で深い学び」をととして、課題解決を可能とする思考力、判断力、表現力等を育むとともに自己肯定感を高める
 - イ 生徒の実態を的確に把握し、具体的な対応策を全職員で共有し、実践する
 - ウ 充実したキャリア教育を通して、社会的・職業的に自立できる能力と態度を育む
- (2) 豊かな人間性を育成する
 - ア 生命を大切にすることや個に寄り添う心を大切にし、人権尊重の精神を育む
 - イ 礼節・規範意識を身に付け、善悪を判断し自らを律する力を養う
 - ウ 校舎間、学科間を横断した交流により連帯感や愛校心を高める
- (3) 心身の健康を自ら高め、管理する態度を養う
 - ア 基本的生活習慣を確立する
 - イ 情報モラル教育をととして SNS とのかかわり方を整える
 - ウ 部活動、生徒会活動、学校行事等をととして達成感や充実感を味わうとともに自他の安全や心身の健康を保持・増進する態度を養う
- (4) 地域との連携・協働（地域から学び、自ら考え、地域に貢献できる人材育成）
 - ア 産官学連携による実践的な課題解決学習の充実を図る
 - イ 時代や地域のニーズ等を踏まえた学科の特色化を図る
 - ウ 農業・商業及び海に学ぶ体験的・実践的な教育活動を展開する

3 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	重点目標の具現化	校舎制や 7 学科 8 コースの特徴を生かし、地域のニーズ等を踏まえた学校の特色化を図る。	KSH コンソーシアム委員を年 5 回以上活用し、地域のニーズに気付き、地域から信頼される学校づくりを目指す。	○KSH 構想におけるクリエイティブ・ハイスクールとしての事業実践の充実とともにコンソーシアム委員の活用を図る。 ○地域協働による課題発見や、その解決に向けた探究活動。	B	○12 月及び 2 月に本渡校舎・マリン校舎合同で開催した探究成果発表会では、コンソーシアム委員の先生方から指導助言をいただいた。本校の探究的な学びを進化させていきたい。 ○7 つの学科で行政や地域の事業所等と連携した課題解決型の学習を実践できた。
	職員の資質向上	校内研修の充実と研修等参加への積極的な奨励。	ミドルリーダーの育成。	各担当業務における具体的目標の設定とその進捗状況の把握。	A	校内研修（学習指導・生徒指導・特別支援教育等）の校内研修の充実を図った。
	業務改善、働き方改革の推進	業務の整理や効率化による教職員のワーク・ライフ・バランスの実現。	○業務の可視化を行い、時間外在校時間が月 45 時間を超える教職員を各校舎前年度平均以下とする。（前年度：本渡校舎 11.1 人 マ	○ICT 活用やペーパーレス化等業務改善策の定着を図る職場環境の整備によって、職員間の働きやすさを高める。	B	○各分掌部における業務の整理を行い、次年度以降見通しを持って業務に取り組めるよう工夫改善を図った。

			リン校舎6.3人) ○職員のメンタルケアを図る。	○定時退勤日を設定し、定着を図る。 ○日々の声掛けと職員面談の実施。		○時間外在校時間（12/31現在）月平均45時間以上の教職員数 本渡校舎 14人（24.1%） マリン校舎 5人（15.2%） ○衛生委員会を毎月実施。教職員の時間外在校時間及び健康状況の確認を行うとともに、管理職が適宜声掛けや面談等を実施し、業務の負担感の軽減に向けたアドバイスや支援等を行った。
	危機管理体制の強化	危機管理意識の向上と的確な対応。	危機管理マニュアルの点検・見直し及び危機管理訓練の実施。	実験・実習・体育的行事における事前指導の徹底。	A	危機管理マニュアルの点検と見直しを随時行うとともに、職員研修等で周知を行い、組織として危機管理意識の向上を図った。
		学校管理下の事故未然防止の取組。	実験・実習・体育的行事などでの事故「0」を目指す。	定期的に劇物や薬物の保管管理状況の点検、施設・設備・実習船の点検を実施する。	A	実験・実習・体育的行事等における事前指導を徹底したことにより、健康面等に重大な影響を及ぼす事案はなかった。
学力向上	授業の工夫・改善	分かりやすい授業の研究と実行。	研究授業の充実と教科横断型授業の実施。	○公開授業週間及び研究授業や振り返り会を実施する。 ○各教科の連携を強化する。	B	○公開授業では保護者をはじめ、自治体関係者や中学校校長、コンソーシアム委員の方々に参観いただき、御意見をいただいた。また、研究授業ではデザイン会や協議を行い、深めることができた。 ○一方で各教科の連携を体系的に行うことができなかったため、研修等を取り入れながら教科や校種間の連携を進めていく。
		I C T 教育の推進。	支援員等を活用した職員研修の充実。	1人1台端末活用事例を共有し、I C T 支援員等による研修を実施する。	A	「miroを活用した授業展開」をテーマに、支援員の講義と演習を実施した。分かりやすい授業をめざして、次年度もニーズに応じたI C T 教育の研修を計画する。
	基礎学力の定着・学習意欲の高揚	基礎学力の定着支援、発展学習の支援。	個に応じた学習支援。	考査前の補習や補講を実施するとともに、個別指導の充実を図る。	A	考査前学習会、学期末の補習や補講以外にも、各教科で個別の学習支援を行った。しかし、生徒の定着としては十分でない部分もある。進路指導部の配信課題等を活用しながら、基礎学力の定着にさらに力を入れる。
		生徒の学習意欲向上に結びつく体制作り。	新学習指導要領の理念実現にふさわしい評価システムの改善。	教科・科目の特性に合わせた観点別評価の実践を図る。	B	観点別評価方法については、職員の共通理解を図ることができなかった。教科・科目の特性を踏まえつつも基本となる部分については理解を促していく。

キャリア教育 (進路指導)	職業観・勤労観の育成と進路意識の向上並びに進路に関する諸能力育成を旨としたキャリア教育の充実	生徒一人一人の多様な進路の先に応じた、きめ細やかな進路指導。	生徒の適性や特性等を把握する機会を設け、その結果を活用して生徒の進路希望を尊重した進路指導を行う。	<p>○職業適性検査を実施し、生徒の適性や特性を把握し、職員間での情報共有を図る。</p> <p>○進路希望調査を各学期に実施し、それに基づいて担任等個別面談を実施する。</p> <p>○キャリアサポーターによる個別面談を行い、教員とは違う視点からの助言を活かした進路指導を行う。</p>	A	<p>○9月に1年生を対象に職業適性検査を実施し、その結果を担当がクラス生徒にフィードバックして進路を考える機会とした。進路希望調査を行い、その結果を各学年で情報共有してその後の指導に活かした。3年生就職希望者を対象にキャリアサポーターとの面談を実施し、生徒一人ひとりに応じたきめ細やかな進路指導を行なった。</p> <p>○職業適性検査を通して生徒の得意な分野や興味などを把握し、職員間での情報共有や生徒との面談などに活用した。また、3回の進路希望調査を通して、最新の生徒の進路希望状況を把握したり、2年生を対象としたキャリアサポーターの面談を秋に実施することで情報提供や助言をしたりするなどして、生徒一人一人に寄り添った進路指導につなげた。</p>
		職業観、勤労観の醸成。	インターンシップ等とおして、学校で学ぶことと社会及び職業生活との関連について学ぶ機会を設ける。	<p>○働くことの意識の把握と高揚の適性のための学科の2年生を対象にインターンシップを実施する。</p> <p>○卒業後進学の進路も含めた将来の進路について考えるための講話1回を実施する。</p>	A	<p>○全学科の2年生を対象にインターンシップを実施し、社会人としての責任感やルール・マナーについても学び、学校での生活との結びつきについて考える機会とすることができた。また、自己の職業適性などについての理解を深めることができた。インターンシップとは別に学科独自の現場実習を実施する学科もあった。</p> <p>○全校生徒を対象に進路講話を実施する以外にも、企業見学や専門分野の企業の方からの講話などを計画して、より生徒の進路希望の実態に合う校内進路ガイダンスを企画・実施することができた。</p>

		進路情報の発信や進路希望等の情報の共有。	進路情報などをプリントや学校ホームページ、すぐーる等を用いて発信する。	<p>○保護者への進路情報提供を学期毎に実施する。</p> <p>○進路希望調査や模擬試験等の結果を集約し、生徒に現状の把握と今後の方向性を持たせる。</p> <p>○職員連絡会等を月1回以上実施する。</p>	A	<p>○全学年の生徒が「Handy 進路指導室」で本校に届いた求人票を閲覧できる環境を整え、タブレットを活用して生徒が保護者と進路相談できる状況を構築した。また、学校で開催した進路行事等をホームページ等で紹介することができた。</p> <p>○進路だよりを発行し、すぐーるを用いて保護者に配信し、情報提供を行った。また、進路希望調査を定期考査や連休などをまたいで実施することで、保護者と話し合う時間を確保できるよう配慮し、すぐーるでも調査実施の案内ができた。</p>
生徒指導	自己指導能力の育成	基本的な生活習慣の定着。	<p>○挨拶の励行。</p> <p>○自ら挨拶のできる生徒の育成。</p> <p>○時間を守る。</p>	<p>○登校指導時の挨拶励行。（生徒会活動含）</p> <p>○教職員及び生徒間の挨拶に対する意識調査を行い改善に繋げる。</p> <p>○毎朝の登校指導を行い、継続的な遅刻指導を実践する。</p> <p>○スマートフォンの利用状況等から問題点を分析し、利用改善を図る。</p>	B	<p>○生徒会や生活委員が定期的にあいさつ運動を行ったことで、主体的に自らあいさつをする生徒が増えた。</p> <p>○基本的な生活習慣の確立のため、本渡校舎では遅刻指導に力を入れた。今年のみではなく、これまで数年にわたり継続して取り組んできた成果と全職員の協力のおかげで全体的な遅刻数の減少につながった。次年度以降もさらに減らしていきたい。</p> <p>○SNSの使用方法など、学校全体で共通認識を持って行動できるような機会を早い段階で設定する。特にSNSの利用は生徒の日常に欠かせないものとなっているため、家庭での指導（フィルタリングの設定や使用時間の設定など家庭でのルール作り）を強化する必要がある。</p>
			○身だしなみを整え、清々しい整容	<p>○年間を通して定期的に整容指導を実施する。</p> <p>○生徒自身の整容面への意識向上を目的とする主旨を踏まえ、校則の見直しなどを生徒とともに進め、教職</p>	B	<p>○整容指導を月に一度ずつ行っているが、頭髪を整えることができずに指導を受ける生徒は毎月数人程度いる状況である。理想は、常日頃から自主的に整える生徒の意識の育成を図りたいが、まだそこまでの段階には達していない。しかし、指導後にはしっかりと頭髪を整えてくる生徒ばかりなので、日常の学校生活の中で、教職員からの声掛けの</p>

				員間の連携を図り、日常の整容指導に力を入れる。		頻度を増やすことができれば、状況はさらに改善できると考える。
		他者への思いやりと自尊心の育成。	情報モラル教育の充実。	集会や人権教育LHRを活用し情報モラルに関する講話を実施。また、情報安全・情報モラル教育についての職員研修を実施し、教職員の資質向上を図る。	A	情報モラルについては、1年生の宿泊研修時に40分程度時間を割いて行い、保護者に対しても育友会総会時に説明を行うなど年度の最初に丁寧に指導を開始している。その後は、SNSをめぐるトラブルが起きた際に、クラスや学年などその規模に応じて、機会をとらえ指導を徹底している。今年一年間を通してSNSによる大きなトラブルはなかった。
		集団生活を通じた共生の心の育成。	寮生活の充実（マリン校舎）。	○自主自立の精神を育成する充実した寮生活に向けて、適宜アンケート調査を行う。 ○寮生活全般の改善点を把握し、人間関係を考慮した部屋替え、食事の改善を行い、寮環境を整備する。	A	今年度からマリン校舎は大きく寮の管理体制が変更となり、管理人が3名配置となつて教職員は22:00までの夜勤となった。また、1年生の女子生徒は本渡の桜華寮からの通学となり、本渡校舎と連携して情報を共有することもあった。そのような中で、生徒指導事案につながるような事例は起きず、生徒が自律して行動する場面が増えたように感じる。登校時間も以前より20分以上早くなったが、それへの適応もスムーズであった。唯一、寮の最大人数を超えて受け入れていることから、個別の学習スペースの確保にはまだ課題が残る。
		交通ルールへの遵守。	○自転車・原付の乗車マナーの指導徹底。 ○交通違反・事故件数の削減。	○自転車通学生及び原付通学生に対しての講習会の実施。 ○自転車乗車時のヘルメット着用の重要性について、生徒の意識涵養を図る。 ○交通安全に関する標語やポスターの掲示を行うなど、啓発活動を活発にする。 ○交通事故現場等での対応マニュアルを生徒へ配付する。	B	○自転車通学生について、今年度も自転車ステッカーの張替えや貼っていない自転車で登校をする生徒がいた。今後引き続き見逃さずに指導したい。 ○交通事故、違反が2学期終了時点で全体5件。うち、事故が5件、違反が0件。交通安全に関する日頃の指導や計画的な講話や講演会の実施などを強化し、次年度以降も交通事故や違反を減らしたい。 ○事故・違反は未然に防止することが大切であり、次年度は交通委員による啓発等を行うなど予防・啓発に積極的に取り組む。
人権教育の推進	個人を尊重し、相互理解を深め、差	生徒の人権意識を高める教育活動の推進	教職員一人ひとりが、人権教育実践の担い手であるこ	○各教科の授業およびLHRにおいて人権教	A	○学期に一度の人権教育職員研修及び学年ごとの人権学習LHRを実施した。職

	別やいじめのない学校・学級づくり生命を大切にすることを育む指導		との意識付けを図る研修などを行う。	育に取り組む。また各学年で実践研修に取り組む。		員研修の事後にはアンケートを実施し、次の研修に生かすことができた。LHRは指導案を作成し共有することで、実施者の負担を軽減するとともに、誰もが指導できる基盤づくりができた。 ○LHR後のアンケートにより生徒の人権意識の高まりが確認できる一方で「寝た子を起こすな」論が残っていたり、日常生活における言葉の悪さを耳にする場面があったりする。朝礼や終礼を活用した日頃の呼びかけの設定が必要だと思われる。
		生徒が安心して相談できる環境づくりと個に応じた組織的な対応。	○生徒の人権委員会の活性化を図る。 ○相談体制の充実。	○「心のきずなを深める」ための標語の作品募集。 ○特別支援教育委員会（マリン校舎）、教育相談部会（本渡校舎）と協力して、得た情報を人権教育にも生かす。 ○保健室との連絡を密にし、SCなどの情報を人権教育に生かしていく。	B	○生徒人権委員による、人権委員会年度目標のクラスにおける発表・掲示や「心のきずなを深める」ための標語づくりの説明・標語集め・短冊への記入等、委員が活躍する取組を増やしたことで、人権委員としての自覚と自己の有用感を育むことができた。 ○相談体制の充実に向け、教育相談部と連携し、各クラスにSCの紹介掲示物を配付・掲示することができた。 ○相談体制の充実につながる各部や保健室からの情報は得たものの、人権にかかる相談体制の充実とまでは至らなかった。教育相談部との連携を密にし、人権にかかる相談体制について再考する必要がある。
いじめの防止等	いじめ根絶のための啓発活動	いじめ根絶に向けた教職員一人一人の組織的な対応。	いじめ防止対策委員会の充実といじめ事案発生時のスピード感のある対応。	担任、学年、学科と連携をとり、教育相談部など他の分掌部と協力してアンケートや面談週間を実施し、未然防止に取り組むと共に、いじめ防止	A	昨年度に比べ、いじめ事案は両校舎とも大幅に減少することができた。それに伴い、学校や寮生活が楽しいと感じる生徒数もアンケート上では多くなっている。一方で、「理由次第ではいじめてもよい、いじめられても仕方ない」と考えている生徒が一定数いることもアンケート結果から判明し、学校教育全体を通して、他

				対策委員会を適宜開催し、的確な対応や未然防止策を全職員で共有する。		者を思いやる生徒の育成の必要性を感じている。
		生徒一人一人が人権感覚を育み、良好な人間関係構築のための支援。	具体的行動指標や標語、ポスター等作成。	「いじめ根絶宣言」を全校生徒に周知し、全校集会や学年集会、LHRを活用して、講話やポスター掲示や標語の募集を行い、生徒自らが豊かな人権感覚を磨く機会とする。	B	○いじめ問題だけでなく、様々な人間関係に関する課題や問題を未然に防止するためにLHRを活用した「人やものを大切にする心」や「コミュニケーション能力」を育てる取り組みなどをもっと計画的に実践する必要がある。生徒指導部だけでなく教育相談部や人権教育主任などともっと連携を深めて取り組んでいく。
地域連携(コミュニティ・スクールなど)	保護者や地域等との連携 情報発信	育友会、同窓会、自治体、企業との連携。	育友会、同窓会、地域と協力し、地域活性化に協力しながら教育活動を充実。	学校行事や商品開発、地域活性化において、育友会、自治体、諸団体と協力する。	A	○育友会がマリン祭体育部門競技に参加、文化部門ではカレー販売、校内長距離走大会では豚汁の炊き出しを行っていただき協力を得た。苓北町のじゃっと祭、お城まつり等、地元のイベントに生徒がボランティアとして参加、地域の活性化に協力しながら教育活動を充実させた。 ○文化祭では、育友会で寄せ植えの展示、餅の販売やバザーをして好評であった。 ○12月にはミニバレー大会を両校舎から参加して盛り上がった。今年度はすべての育友会が関わる行事の案内を両校舎に行い、育友会活動を協力して行うことができた。
		広報活動の充実	情報機器を活用し、地域への情報発信	ホームページ、Instagramの活発な更新、学校新聞等の配付。	A	○学校新聞を毎月発行、中学校や地域の回覧板で情報発信した。 ○Instagramでは投稿数820、フォロワーも2500人を超えた。教育活動を広く情報発信できた。 ○Instagramでの広報活動は充実したが、両校舎

						の投稿頻度について工夫や改善を行う。
--	--	--	--	--	--	--------------------

4 学校関係者評価

○本校の校舎制や7学科8コースの特徴を生かした学校の特色化について

12月と2月に課題研究に関する発表会を実施しており、コンソーシアム委員等の活用など地域の関係機関の活用を図り、重点目標の具現化に向け、A評価となるよう頑張っている。

○働き方改革について

45時間を超える教職員の数について、本渡校舎は前年を下回っているものの、働き方改革の取組は十分進んでいると捉えている。A評価をつけることで、先生方の仕事へのやる気等を引き出すことができるのではないかと考えている。

○観点別評価の工夫改善について

新学習指導要領における観点別評価の共通理解を図ることができなかったとある。研修等を通じて、学校としての取組を行っていると思うが、共通理解を得られるための方策などを検討し、すべての教員が取り組めるようにしてほしい。

○キャリア教育の充実

本年度は8名の就農者を出していただくなど、天草地域の農林水産業の魅力発信に向けて、インターンシップや企業等講演会を実施しながら、キャリア教育を行っている。近年の傾向として、高校生の離職率が上昇していると聞いており、離職防止に向けた取組等を実施してほしい。

○施設設備等について

学校施設などの雨漏り等の実情について、先生方のアンケートに記載してある。限られた予算ではあるが、必要な部分については、対応をしてほしい。

○情報発信について

Instagramによる情報発信を活発にしている点については、非常に評価をしている。しかし、学校のホームページの更新についてもInstagram同様に頻繁に更新することで、さらに情報発信がなされていくと考える。

5 総合評価

1 本年度の学校教育目標

本校の校訓を基盤とし、各学科コースが特色ある教育活動を実践している。特に年間に2回実施したKSH研究成果発表会においては、両校舎合同で開催することで、それぞれの校舎の取組を生徒が知る機会となり、今後の研究活動の新たな方向性を生徒自ら考えることができた。加えて、コンソーシアム委員より年々研究の精度が上昇していること、商品開発や地域課題研究など身近な問題に目を向けることにより、今後の天草地域に貢献できる人材育成にむけての基礎作りができてきているとの感想をいただいた。

合同レクレーション大会や1年生の集団宿泊研修等の両校舎の生徒が交流する機会を設けることで、生徒自らが天草拓心高校の一員であるという愛校心や自己肯定感の醸成ができた。

【学校評価アンケート】

※数字は「十分達成できている」＋「おおむね達成できている」の割合

Q2 学校では学科の特色を生かした教育活動が行われており、入学して（入学させて・勤務して）良かったと思う。

生徒：93%で、昨年から±0ポイント

保護者：93%で、昨年から±0ポイント

教職員：82%で、昨年から＋3ポイント

2 本年度の重点目標

(1) 確かな学力を育成し、生徒一人一人に寄り添った指導の充実を図る

個に応じた学習指導や進路指導等を実践しており、観点別評価及び「主体的・対話的で深い学び」による授業改善に向け各教科科目で取り組んでいる。自己評価総括表において、記述されているとおり、研修等を行ってきたものの、観点別評価に関する共通理解が不十分であったことから、次年度以降も継続した研修の実施が必要である。

療育手帳等を所持する支援が必要な生徒に対し、通級指導や自立活動等の教育活動を行うことで、生徒一人一人に寄り添った学習指導・進路指導を行うことができた。

【学校評価アンケート】

※数字は「十分達成できている」＋「おおむね達成できている」の割合

- Q 4 先生は授業をよりよくするため工夫している。(工夫改善につながっている。)
- 生徒：92%で、昨年から－2ポイント
保護者：70%で、昨年から＋1ポイント
教職員：61%で、昨年から－1ポイント
- Q 5 学校では、個々の希望に応じた進路指導が行われている。
- 生徒：93%で、昨年から＋2ポイント
保護者：77%で、昨年から＋3ポイント
教職員：81%で、昨年から－1ポイント

(2) 豊かな人間性を育成する

昨年度に比較すると特別な指導やいじめ等の件数が減少し、比較的落ち着いた学校生活を送ることができた。生徒においては、校則や整容等のルールを守る規範意識が定着してきたものの、教職員は学校評価アンケート「私(生徒)は、校則及び生活の規律を守っている」の項目で、まだまだ不十分であると感じており、教職員一丸となった指導を行いたい。

SNSに起因する生徒間のトラブルは、依然として出ていることから、新入生宿泊研修時の指導や全校集会・学年集会での指導、各教科・科目における情報モラルに関する学習などを通じた継続的な指導の必要性がある。

【学校評価アンケート】

※数字は「十分達成できている」＋「おおむね達成できている」の割合

- Q 7 私(生徒)は、校則及び生活の規律を守っている。
- 生徒：93%で、昨年から－2ポイント
保護者：79%で、昨年から－2ポイント
教職員：55%で、昨年から－13ポイント

(3) 心身の健康を自ら高め、管理する態度を養う

スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等を活用することで、悩みを抱えた生徒に対して支援を行うことができた。また、特別支援教育推進委員会で、支援が必要な生徒の情報を共有し、スムーズに学習活動が行えるよう、学年や教科・科目担当者と情報共有を行った。

【学校評価アンケート】

※数字は「十分達成できている」＋「おおむね達成できている」の割合

- Q12 学校には、生徒が悩み等を相談できる雰囲気がある。
- 生徒：81%で、昨年から－3ポイント
保護者：59%で、昨年から－2ポイント
教職員：85%で、昨年から－2ポイント

(4) 地域との連携・協働(地域から学び、自ら考え、地域に貢献できる人材育成)

1年次の「総合的な探究の時間」における「天草学」及びカタリバを活用した探究活動に関する外部とのオンライン授業を基盤とし、2年次以降それぞれの学科・コースの特徴を生かした探究活動の実践を行った。また、探究学習に関する成果発表会を年2回実施、天草地域にある県立高校が合同で「学びの祭典」を実施するなど、地域・行政・関係事業所等の教育力を活用した学習活動を推進した。

地域との連携した学習活動を推進していくためにコンソーシアム委員会を開催し、委員の方々からより積極的に地域と関わる仕掛けづくり等、今後の地域と連携した教育活動に関する提言等をいただいた。

【学校評価アンケート】

※数字は「十分達成できている」＋「おおむね達成できている」の割合

- Q20 学校は、地域に開かれた学校づくりが行われており、地域に情報を発信している。
- 生徒：94%で、昨年から±0ポイント
保護者：84%で、昨年から＋6ポイント
教職員：92%で、昨年から＋6ポイント

3 自己評価総括表

(1) 学校経営

○特色のある学校教育

7 学科 8 コースの特長を生かした教育活動については、探究学習に関する成果発表会を年 2 回実施することで、生徒同士で各校舎での取り組みについて共通理解を図るとともに、コンソーシアム委員等から探究活動の充実に向けたアドバイス等を受けることができた。

○時間外勤務縮減

時間外勤務縮減に向け、校務の整理や業務分担の工夫等の対応を行っており、45 時間以上の教職員は減少している。しかしながら、月 80 時間を超える教職員もあり、衛生委員会による健康状況の把握や日常における声掛けを行うことで、負担軽減を継続して図っていく。

(2) 学習指導

新学習指導要領における観点別評価に関する共通理解を図ることが難しかった。その理由として、教科・科目の特長や評価の観点等の整理が不十分であったと考える。

今年度の卒業生が観点別評価を 3 年間実施してきたことから、単元目標が適切であるか、各教科・科目で評価項目や評価のタイミング等の整理を行う。

また、学習評価が生徒の理解度を測定するものではあるが、併せて教員側の学習指導が適切であったかの判断材料となる。単元目標を適切に設定し、目標に合わせた評価の観点を計画、授業実施後に振り返りを行うなどの P D C A サイクルを意識した学習指導が必要である。

(3) 生徒指導

昨年度と比較し特別指導に関する件数が両校舎とも減少し、生徒は落ち着いた学校生活を送ることができた。しかしながら、SNS に端を発するトラブル等に関しては、日常的に起こっており、情報モラルに関する指導は継続して行っていく必要がある。

なお、学校評価アンケートでは、教職員は現状に満足していない状況である。生徒一人一人が自ら考え行動できるよう、自己指導能力の育成に向けて、共通理解と指導の徹底が必要である。

(4) 進路指導

生徒に対して進路情報の提供、キャリアサポーターによる面談、インターンシップや進路ガイダンス等を開催することで、生徒一人ひとりに応じたきめ細やかな進路指導を行うことができた。また、支援が必要な生徒が在籍し、福祉サービスを利用する形で A 型事業所への就職者が出るなど、生徒の実態把握を行った上で、事業所と連携し、現場実習を複数回実施し、生徒のニーズに合わせた指導を行うことができた。

(5) いじめ防止に関する取組

昨年度に比べ、いじめ事案は大幅に減少しており、相談体制の充実が考えられる。他方、「理由次第では、いじめてよい、いじめられても仕方ない」と考えている生徒が一定数いることが判明し、いじめ防止や人権教育の推進等、他者を思いやる気持ちの醸成を継続していく必要がある。

6 次年度への課題・改善方策

1 7 学科 8 コースの特色を生かした学校づくり

次年度以降も各学科・コースの特色を生かした学校づくりを行うため、①行政との連携、②関係事業所との連携、③地域住民との連携を柱としながら、学科の魅力化を図っていく。特に「総合的な探究の時間」や「課題研究」等を活用し、本校から商品開発や地域課題解決等の提案を行い、地域からの意見等をフィードバックしながらさらなる探究を深めるなど、普通科と農業・商業・水産の専門学科の特徴を生かした学校づくりを継続していきたい。

2 学習指導の充実

今年度の反省の中で観点別評価についての共通理解が難しかったことから、次年度は学習評価に関する研修の充実及び授業改善に向けたタブレットの活用方法等の研修充実を図ることで、教科指導力の向上を図る。

3 生徒指導の徹底

今年度の学校評価アンケートにおいて、教職員は生徒指導に関して高いレベルを求めていること、生徒指導やいじめ等の件数は減少し、SNSに起因する生徒トラブルは横ばい状態であることなど、「目指すべき天草拓心高校生」について共通理解を図り、次年度以降も教職員が一丸となって指導を行う必要がある。

また、次年度より登下校時の自転車通学生のヘルメット着用について、子どもたちの命を守る観点で、交通ルールの遵守及び生徒自らが命を守る観点での指導を徹底する。

4 キャリア教育の充実

生徒一人一人の進路ニーズに合わせた指導、インターンシップや進路ガイダンス等、生徒の卒業後の進路先をイメージした取組の実施など、今年度の事業をブラッシュアップし、継続して取り組んでいく。

また、基礎学力向上を目指し、マリン校舎で放課後実施している学習テストを、生徒の学習到達度に合わせものにするなど、家庭学習と連携して基礎学力の向上を図る取組を実施する。

5 いじめの未然防止

いじめ未然防止について、教職員が生徒の実情を理解し、生徒の変化を見逃さないことが重要である。そのためには、日頃から生徒とのコミュニケーションをとり、定期的な生徒との面談、保護者との情報交換などを密にして、学年会や生徒理解研修等での共通理解を図るようにしたい。